

附属幼稚園の教育(3)

村石 京

人とかかわりについて

新教育要領では領域として、次の五つの柱をあげています。

- 心身の健康に関する領域「健康」
- 人とかかわりに関する領域「人間関係」
- 身近な環境とかかわりに関する領域「環境」
- 言葉の獲得に関する領域「言葉」
- 感性と表現に関する領域「表現」



そしてこの五つの領域の中で、特に大きくとりあげられているのが「環境」と「人間関係」の二つの柱であるところに注目したいと思います。

「環境」とは新教育要領で新たな視点としてとりあげられたものであり、これに関しては後章でまた触れるようにしたいと考えていますが、「人間関係」は以前の幼稚園教育要領の六領域(健康・社会・言語・音楽リズム・絵画製作・自然)と対

比してみると、「社会」の項との関連が深いと見てよいのでしょうか。

人とのかかわりに関する領域「人間関係」のねらいは

(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう

(2) 進んで身近な人とかかわり、愛情や信頼感をもち

(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける

となっております。このことに関して附属幼稚園ではどのような教育を行っているかについて述べて見たいと思います。

「人とのかかわり」に関する領域、これは私どもの附属幼稚園の教育の中で、最も重きをおいている面といえるのではないのでしょうか。幼稚園の日常の保育の中にある人間関係は、「教師と子ども」「子ども同士」「子どもと子どもとそして教

師」この三種が考えられます。それらは一対一の関係の場合もあるし、複数であったり、少し大きな集団である場合もあります。そして三種は夫々別々であるわけではなく、一緒になったり、入り組んだり、あるいは個と個の関係であったりしています。そのいずれもが大切であることは言うまでもありませんが、先ず第一に子どもが安定した気持ちを持ち、園生活が楽しくなってくるには、教師と子どもとの関係から出発すると言えるでしょう。教師の大きな愛情に見守られ、支えられて安心して園での生活が送れるという体験を通して、子どもも自分の方からも人とのかかわりを求めるようになっていくのだと考えています。

日常の保育の中で、子どもとの関係をつくる第一歩として保育者がしなければならないことは、子どもの言うてくることを真剣に聞き、きちんと受けとめていくことにあります。そして子どもがしていること、あるいはしようと考えていること

を認めていくことです。保育の中で、自分が教師であるから子どもより上に立って教えるとか、要求したりするのではなく、子どもが主であり、子どもが前面に出て保育者は後からそれを支えていくという気持ちを持つようにしたいものです。こうして子どもを認めていくということによって、保育者自身が子どもに対して充分心を開き、子どもを受け入れていくという保育の基本原則をもつならば、子どもも自分を認めてくれる人に対して安心して心を開き、お互い士の関係は望ましいものとなっていくでしょう。保育者と子どもとの間に大きな人間関係のきずなが育つためには、先ず保育者の側から子どもを全面的に受け入れていくことが基礎になると思います。大切な人格形成の基が築かれる幼児期にあって、人間関係における信頼感を持つというのは何にもまして重きをおかなくてはなりません。附属幼稚園では私も保育者は子どもの心を大切にして、温かく大

きく包み、子どもの言うことを真剣に聞き、子どもの中の心に人に対する愛情・信頼が育っていくようにしたいと考え、努力しています。

次に子ども同士の関係を考えてみたいと思います。人間同士のかかわりは複雑で入り組んでいることもよくありますが、園生活の中での子ども同士の関係も決して平坦ではなく、かかわりが深くなるとかえって、自分の思いが相手に通じなかったり、受け入れてもらえないための悲しい思いや摩擦が出たりする場合も起きたりします。主張の強すぎる子ども同士では言いあいなどのトラブルも見えてきますし、逆に強い子どもと受け入れられているばかりの子どもの関係は、一見おだやかにいっているようでも、それは決して好ましい人間関係とは言いきれません。保育者は、子ども同士のかかわりを深く見つめることをしなければならぬと思います。そのためには、子どもの動きや表情を外側からとらえるのではなく、保育者も子

きく包み、子どもの言うことを真剣に聞き、子どもの中の心に人に対する愛情・信頼が育っていくようにしたいと考え、努力しています。

どもの本当の仲間となって、子どもの思いや考えていることをわかっていくようにし、子ども同士の関係をうまく育てたり、子ども同士と教師の関係も順調に育っていくようにしたいと考えています。「先生はいつも自分のことをわかってくれます。」「友だちはいつも自分を支えてくれる。」「先生が入ると遊びがもっと楽しくなる。」こんな思いを一人ひとりの子どもが夫々の胸の中に持ってくれるなら、そこには人に対する信頼感が育っているといえるでしょう。

私どもの幼稚園では、教師が何かを教える指導するという時間を出来るだけ少なくして、自由な遊びの時間を多く持つようにしています。それは子どもにとって遊びが何よりも大切であり、遊びを通して子どもの中に育つものが何より多く、深くあると考えているからです。遊びながら子どもたちは考えたり、工夫したり、努力したりしてい

くとともに、遊びながら仲間づくりをし、友だち関係を深め、友だちとともに喜んだり、驚いたり、あるいは悲しんだりということを体験しています。これは人と共感するという心であり、やがて相手に対する優しさや思いやりとして育ってきます。人間関係というのは、一方的な受け入れや押しつけではなく、相手に対する思いやりや優しさがあるからこそ、素晴らしいといえるのではないのでしょうか。私どもの幼児教育の原点は、人間を育てる、心を育てることにあると考えています。そのため遊びを通しての日々の中で、よい「心」の育ちがあるようにと願い、教師も子どもとともに遊びの仲間入りをしたり、一緒に遊びを進めたり、見守ったりしています。そして子どもと共感出来る心を持つようにありたいと考えています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)